

熊本大学病院 医療情報経営企画部 熊本大学大学院 医療情報教育学部 医療情報医学



教授 中村 太志

令和四年四月一日付で、熊本大学病院医療情報経営企画部（熊本大学大学院医学教育部医療情報医学）の教授に就任いたしました。謹んでご挨拶申し上げます。

私は、久留米大学医学部医学科を卒業後、平成十三年（二〇〇一年）に小川久雄教授（現熊本大学学長）が主宰される熊本大学医学部附属病院循環器内科に入局し、循環器内科の専門医として研鑽を積ませていただきました。大学院（生体機能薬理学専攻）では基礎研究に従事し、同教室の助教を経て、ジョンズ・ホプキンス大学医学研究所で研究を行いました。五年にわたる留学となり、心不全における次世代の治療標的と期待されるプロテインキナーゼ（PKG）の活性調節機構と新たに同定した基質の生理機能解析を行い、

熊本大学に戻りました。基礎研究に長く従事していたため、帰国後は新規機構の臨床応用に向け医工連携を進めていきましたが、生体情報を活用したヘルスケアや医療情報の標準化などの情報工学にも興味をもち取り組むようになりました。

二〇一七年、病院情報システムの更新に伴い診療データウェアハウス（以下、DWH）が当院に導入されました。ご縁があり、DWHに収集蓄積されたデータを厚生労働省が推進する標準規約へ変換する機会をいただき、糖尿病や循環器疾患に関する診療データの交換共有に携わらせていただきました。標準規格データを交換出力するこの情報処理は、多施設共同によるデータベース研究に本院の参画を可能にし、ビッグデータ排出のための研究支援と臨床研究に役立つデータ活用に向けた貴重な経験となりました。

二〇一八年からは先代の宇宿功市郎教授にご指導を賜り、電子カルテや診療録の管理、ネットワーク保守、院内の企画運営に携わり、システムの安

定稼働と安全で円滑な情報伝達交換により切れ目のない診療業務を支える経験を積ませていただき、この度、医療情報経営企画部を引き継ぐことになりました。振り返ると、節目節目で様々な出会いや経験があり、今に繋がっていることを実感しています。

電子カルテが普及し、「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」が策定されてから、実はまだ二十年も経ちません。しかし、IoTやビッグデータ、AI、ロボットなどの革新的な技術により今や Society 5.0 の時代が到来しています。この ICT の発展はさらに加速し、医療分野も目覚ましいスピードで対応に迫られ、医療DXが進むことが予想されます。医療情報の分野に携わるようになり感じることは、どんなに情報処理技術が発展しても、やはり最後は人とのコミュニケーションが大事だということです。この分野で重要とされる Communication, Collaboration, Coordination の 3C を意識し、情報と情報だけでなく、情報と人、人と人の結び付きを強化できる環境を整備しながら、安心安全で質の高い医療を患者や地域に提供できるように、医師として責任と覚悟をもって精

励していく所存です。

最後に、「くまもとメディカルネットワーク（以下、KMN）」についても紹介させていただきます。KMNは、熊本県と県医師会、熊本大学病院で取り組む広域医療ネットワーク事業です。病院や診療所、歯科、薬局、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、介護施設などの7類型の施設間で、センターサーバーに蓄積された診療情報や介護情報を多職種で共有することができるため、まさに地域医療連携のための仕組みと言えます。当部は、本院におけるデータ連携を促進することで、県内の急性期から回復期、慢性期にかけた多職種によるシームレスな医療提供体制の実現と、災害時医療を見据えたデータの活用およびバックアップを目指しています。これらの活動により、県全体の医療を俯瞰した大学病院の機能の充実と、全国から注目される情報共通基盤の構築に貢献したいと考えています。

今後ともご指導とご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。